

四三一八番

秋あきの野のに 露負つゆおへる萩はぎを 手折たをらずて あたら盛さか
りを 過すぐしてむとか

四三一九番

高円たかまとの 秋野あきのの上うへの 朝霧あさぎりに 妻呼つまよぶ雄鹿をし 出い
立たつらむか

ひやうまのせうふおほどものすくねやかもち
兵部少輔大伴宿禰家持、ひとり秋野を憶ひて、
聊いささかに拙懐せつくわいを述べて作る歌六首

天平勝宝七歳乙未の二月に相替りて筑紫に遣
はさるる諸国の防人等の歌

四三二〇番

ますらをの 呼よび立たてしかば さ雄鹿をしの 胸別むなわけ
行ゆかむ 秋野萩原あきののはぎはら